

永遠の命—誰が享受しますか 2

ルカの一連のたとえ話からの考察 ①ルカ 15:1-16:13

ルカ 15 章から 16 章にかけて 5 つのたとえ話が記されています。

最初の 3 つは失われたものを再取得した時の喜びについて。そして後の 2 つは、立場の逆転とも言える物語です。しかし、この 5 つには、一つの共通点があると思えます。それは何かと言うことは、ひとまずここでは触れずに、後で明らかにしたいと思えます。

さて、これらの例えを話し始めるきっかけとなった出来事は、パリサイ人のつぶやきからでした。収税人たちが大勢、イエスの話を聞こうとして近づいて来たため、パリサイ人たち「この人は罪人たちを歓迎して一緒に食事をする」と言って、しきりにつぶやいた。とあります。(ルカ 15:1-2) そして、それに応えて、「百匹の羊のうち、失われた一匹の羊」「十枚のドラクマ硬貨」そして「悔い改めた放蕩息子」についてのたとえを話されます。

これらのたとえは、「このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改めの必要のない九十九人の義人について以上の喜びが天にあるのです。」とか「わたしたちはとにかく楽しんで歡ばないわけにはいかなかったのだ。このあなたの兄弟は、死んでいたのに生き返り、失われていたのに見つかったからだ」という具合に、幾分誇張されているとは思いますが、「義」や「公正」といった特質よりも、神の温情の奥深さといった事が強調されています。

これらは、そういう意味でそれなりに分かり易いと思えますが、多くの聖書学者や読者が、最も難解、不可解な部分の一つと評するのが、次の「不義の富」に関する例えです。

先の 3 つのたとえについては後で、再び触れますが、まずは、この「難解なたとえ」に取り組んでみたいと思えます。

話しの概要はこういうものです。

主人の財産を浪費しているのが発覚し、クビになるのは避けられないと知った、ある管理人が、そうなったときのための方策として、主人に債務のある者を呼んで、その契約書を偽造して負債を軽くしてやることにより、恩を着せ、後でその見返りとして、自分を面倒見てもらおうとする。というものです。

どう考えても、不正の上にさらに不正を働いて自分の利益を計ろうと言うのですから、とんでもない話しです。

ところが、この例えの主人は、[意外なことに]を通り越して、驚くべき事に、その不忠実な奴隷を褒めるのです。

その理由として挙げられたのがこれです。

「不義な者ではありますが、実際的な知恵をもって行動したからです。この事物の体制の子らは、自分たちの世代に対しては、実際的なやり方の点で光の子らより賢いのです。」(ルカ 16:8)

もちろん「不義」を褒めたわけではありません。「実際的な知恵を持って行動した」「抜け目のないやり方」(新共同訳)ということに注目しているのです。

しかも、(サタンが支配する)この世で生活している人々は、自分の仲間に対して、「光の子ら」(クリスチャン)より賢いと言って褒めているのです。

聖書中で、極めて難解な所と言われるのも確かにうなずけます。
そして結論はこうです。

「そこで、わたしは言うておくが、不正にまみれた富で友達を作りなさい。そうしておけば、金がなくなったとき、あなたがたは永遠の住まいに迎え入れてもらえる。」(ルカ 16:9 新共同訳)

この訳では、誰が永遠の住まいに迎えてくれるのか明確ではありませんが、他の翻訳では、原文のギリシャ語に含まれる、[ギ語：デコーンタイ] (彼に受け入れられる) から、「彼らが」と訳出しています。

「不義の富によって自分のために友を作り、そうしたものが尽きたとき、彼らがあなた方を永遠の住みかに迎え入れてくれるようにしなさい」(新世界訳)

「不正の富で、自分のために友をつくりなさい。そうしておけば、富がなくなったとき、彼らはあなたがたを、永遠の住まいに迎えるのです。(新改訳)

はたして、「永遠の住まい」はこんな「友達のよしみ」で、しかもこんな不義の人が、ついでに入れてもらえるものなのでしょうか。

この解き明かしをする前に、例えの残りの部分をまとめて整理しておきましょう。

「ごく小さな事に忠実な人は多くのことにも忠実であり、ごく小さな事に不義な人は多くのことにも不義です。それゆえ、あなた方が不義の富に関して忠実であることを示していないなら、だれがあなた方に真実のものを託するのでしょうか。そして、あなた方がほかの人の物について忠実であることを示していないなら、だれがあなた方に、あなた方のための物を与えるのでしょうか。どんな家僕も二人の主人に対して奴隷となることはできません。一方を憎んで他方を愛するか、あるいは一方に堅く付いて他方を侮るようになるからです。あなた方は神と富に対して奴隷となることはできません」。(16:10,13)

内容の区分をしておきますと、1-8までが例え話しです。9節は「不義な管理人」の適用です。つまり、不義の富を用いて友達を作るという実際的な知恵を働かせることの有用性。

そして残りの10-13節は例えに関連してはいますが、例えの適用ではありません。それはすでに9節で終わっています。

明らかにこの部分は内容的にはむしろ正反対の事を述べています。

「あなた方」クリスチャンが、この世での金銭の扱いや、他の人の資産に対して不忠実なら、誰が真実なもの、つまりさらに貴重は霊的な富、そしてその報いである、天の王国での立場などを与えるのでしょうか。ということであり、この点から言えば、先の「不忠実きわまりない管理人」は完全に落第です。

そして、最後に「不義の」はともかくとして、「富」についてのクリスチャンとしての健全な見方、とりわけ、「富」が人の霊的な視力を損なう影響力を持っていることに注意を促しておられます。

これで、この一連の話しは終わりとなりますが、ここで「不義の富で友を作る」とはどのようなことなのかを明らかにしておくことにしましょう。

まず、推察して分かるのは、友にすべき人は何らかの意味で「永遠の住まい」に関わりのある人でなければならないということです。さらに言えば、その人が、自分をそこに連れていってくれ

るわけですから、ほぼ確実に永遠の住まいに住むことになっている人でしょう。

それはつまり「召し」を受けたクリスチャンのことでしょう。

そのように言えるさらに別の点は、それらの人は主人に債務がある人々だということです。

キリストの弟子は、その主人に対して果たすべき努めを負っています。タラントのたとえ話でも「彼らとの勘定を清算」する時について述べています。

では、不義の富をどのように用いて、クリスチャンの負っている努めを幾らかでも軽くしてあげることによって、彼らを「友達」にすることができるのでしょうか。

そのことが具体的に示されているのがマタイ 25 章 35 節以降です。

「わたしが飢えると、あなた方は食べる物を与え、わたしが渴くと、飲む物を与えてくれたからです。わたしがよそからの者として来ると、あなた方は温かく迎え、裸でいると、衣を与えてくれました。わたしが病気になる、世話をし、獄にいと、わたしのところに来てくれました」。・・・『あなた方に真実に言いますが、これらわたしの兄弟のうち最も小さな者の一人にしたのは、それだけわたしに対してしたのです』。・・・これら義なる者たちは永遠の命に入ります。」

それで、実際的な知恵、もしくは「抜け目のない」やり方であったとしても、クリスチャンに善行、同情、支援をした人は、その行為の故に、キリストはそれをご自分に対するものと、敢えて好意的にみなされ、滅ぼされることなく「終わりを生き残り」その後の千年王国の支配に順応するならば、永遠に続く命を得る見込みが与えられるということでしょう。

それはあたかも、面倒をみてあげた友達が、自分を永遠の住まいに行けるように一役買ってくれた状況だというのが、この例えの意味する所でしょう。

ところで、この「永遠の住まい」と訳されている部分のギリシャ語は「永遠の天幕（テント）」という語が使われていますので、やはりその語句のニュアンスからも、地上の住まいであり、しかも、「家」ではないので、当分仮住まいという感じがします。

最終的に「永遠の命」が確定するのは千年後に「命の書」に名前が書き込まれる時ですから、その見込みに入れるということでしょう。

これらのことが、さほど明確に語られず、むしろ、殊更に分かりにくく描かれているのは、恐らくその温情につけ込んで、その救いを侮る事がないようにというエホバの親心からでしょう。

(マルコ 9:41) 「あなた方がキリストのものであるという理由であなた方に一杯の飲み水を与える者がだれであっても、あなた方に真実に言いますが、その者は決して自分の報いを失わないでしょう。」

クリスチャンに対する義の基準は変わってはいません。

しかし「悔い改める一人の罪人については、悔い改めの必要のない九十九人の義人について以上の喜びが天にあるのです。」

一連の前後のたとえを併せて考えるとき、この1匹の羊は、恐らく、自分で勝手にふらふらと出て行き勝手気ままに過ごしていたに違いないのです。

もしあなたが、そのために待たされて放っておかれた九十九人のうちの一人だったとして、一人の悔い改めた罪人のことを自分のこと以上に喜ぶ天と一緒に、あなたも同じように喜べますか。

放蕩息子も、悔い改めて帰って来たとはいえ、やはり、その不忠節はいかばかりでしょう。しかしそれでも、「わたしたちはとにかく楽しんで飲ばないわけにはいかなかったのだ。このあなたの兄弟は、死んでいたのに生き返り、失われていたのに見つかったからだ」この例えに出てくる「兄」の方は、ずーっと忠実を保っていた、99匹の羊と同じ立場の人でしょう。つまり、王国に招かれる人を表しているに違いありません。放蕩息子は、暖かく迎えられました。忠実を保つ事ができなかったわけですから、やはり、「兄」と一緒に王国にはいることはないでしょう。しかし、その悔い改めのゆえに、千年王国で、引き続き神の恵みを受けられることになったわけですから、それは本当に喜ばしいことです。

結果的に人の得る報いは異なります。そして、神の恵みを得る人々は、王国の支配に与る者か、王国の国民としてその支配を受けるかのどちらかですが、そのどちらの報いを受けるものであっても、神の喜びには何の違もないということもこの例えから分かります。場合によっては、死に至るまで忠実な人には、ある種当然に、王国に入る報いが与えられますが、ずーっと頑なで、不忠実だったものが、最後の最後に、悔い改めて、諸国民として、生き残る事になった人に対して、さらに大きな喜びを抱かれるということが、あり得るということです。

これが、キリストとエホバ神のもたれるセンスなのです。それは時に人間の感覚を超えるかも知れません。

(ローマ 11:30 - 33) 「あなた方がかつては神に不従順で、今は彼らの不従順のゆえに憐れみを受けているのと同じように、彼らがいま不従順になってあなた方に憐れみが及んでいても、それは彼ら自身も今や憐れみを受けるためなのです。神は彼らすべてを共に不従順のうちに閉じ込め、こうしてそのすべてに憐れみを示そうとされたのです。 ああ、神の富と知恵と知識の深さよ。その裁きは何と探りがたく、その道は [何と] たどりがたいものなのでしょう。」